

## 【令和4年度実績】

### 1. 包括的国際化に向けた部局活動の国際展開

「教育」

No.02 (1)-2 卓越した研究を基盤とした国際共同教育の深化, No.16 (4)-1 世界から学生を惹きつける最先端の国際プログラムの開発・提供等, No.17 (4)-2 オープンでボーダレスなキャンパスにおける国際共修の展開, No.28 (2)-1 国際共同利用・共同研究拠点及び共同利用・共同研究拠点の機能強化

#### 実績報告

##### (1) 国際学位プログラムの設置

本部局で初めてとなる国際学位プログラム I-GES (International Graduate Program in Global Education Studies) を設置し, 2023 年 10 月の開講に向けた入学者選抜・カリキュラム・研究指導体制等についての準備を進めた。これは選抜・教育・研究指導などをすべて英語で実施する博士課程後期 3 年の課程のコースであり, 本学の FGL (Future Global Leadership) Program の一環として設置したものである。国際的な視座のもとで教育に関する調査研究や企画運営に向けたリーダーシップを発揮できる人材を育成することを目的としている。現在, 2023 年 10 月の開講に向けた入学者選抜を実施中であり, その就学支援として「JICA 長期研修コース」の活用を準備している。

- ・国際学位プログラム I-GES ウェブページ: <https://www.sed.tohoku.ac.jp/course/i-ges/>
- ・国際学位プログラム I-GES パンフレット: [https://www.sed.tohoku.ac.jp/media/files/i-ges/iges\\_pamphlet2022.pdf](https://www.sed.tohoku.ac.jp/media/files/i-ges/iges_pamphlet2022.pdf)



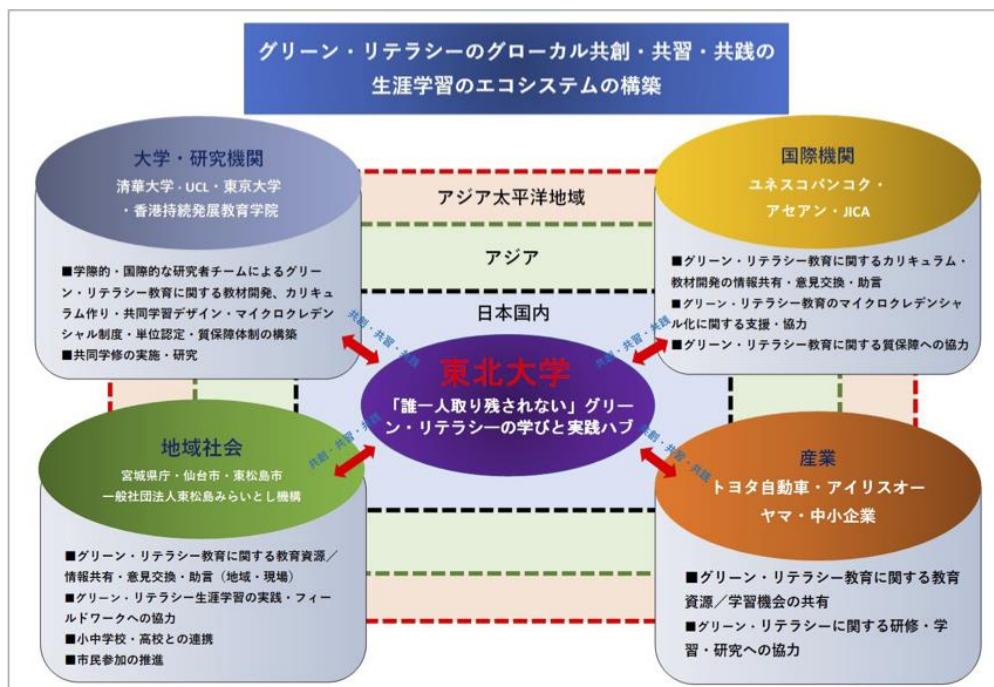
国際学位プログラム I-GES のパンフレット 2022-23

## (2) グリーン・リテラシーおよび SDGs リテラシーの国際共修環境の構築準備

本学はグリーン未来創造機構と共同で、グリーン・リテラシー(持続可能な社会づくりに向けた資質や能力)に関する生涯学習エコシステムの構築を目指した『グリーン・リテラシー』プロジェクト～グローバル・共創・共習・共践～を推進する。本プロジェクトは、国際的・学際的な研究チームとの連携を通して国内・アジア太平洋地域への展開を見据えたグリーン・リテラシー学修プログラムを開発し、産学官民の連携を通じたエコシステム構築により東北大学を「誰一人取り残されない」グリーン・リテラシーの学びと実践のグローバルなハブにすることを旨とする。また、本プロジェクトに内包する形で、SDGs リテラシーに関する国際共修フレームワークの実現を目指した「アジア・太平洋地域における SDGs 国際共同学修フレームワークの構築: 共通カリキュラム構築とマイクロ・クレデンシャル化に向けて」を、同じく本学とグリーン未来創造機構の共同で実施中(令和5年度総長裁量経費として採択済)である。

- ・グリーン未来創造機構 プロジェクト一覧: <https://www.ggi.tohoku.ac.jp/project/>
- ・令和5年度 総長裁量経費要求プロジェクト: 2023 総長裁量経費要求書(教育学研究科).pdf

本年度は、これらプロジェクトの実施に向けた準備作業を推進し、清華大学とのカリキュラム検討や UNESCO バンコク事務所との連携強化等を図った。両プロジェクトとも、持続可能な社会づくりに向けた資質や能力に関する共通カリキュラムの構築とマイクロ・クレデンシャル化による国内外での共修環境の実現を目指したもので、後述する(4) UNESCO との連携と(5) 清華大学との SDGs 教育の共同構築が母体となり、他大学・研究機関とも連携し、これらリテラシー教育に関する教育プログラムの開発・マイクロクレデンシャル化・社会実装を強力に推進するものである。学修プログラム開発は、本学が中心となり、環境科学研究科・工学研究科・経済学研究科・東京大学・清華大学・UCL・香港持続発展学院などの諸機関からなる学際的な研究チームが主導する。オープンバッジに代表されるマイクロクレデンシャルによる互換化と質保証については UNESCO バンコク事務所や ASEAN との協働のもとで取り組み、本学や国内他大学だけでなく、将来的にアジア太平洋地域の諸大学に普及・浸透させることを目指す。

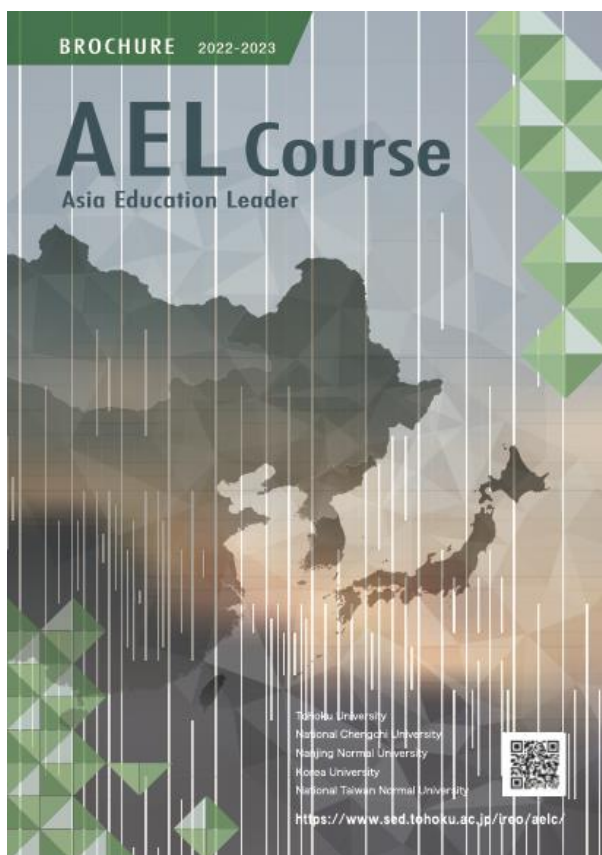


「グリーン・リテラシー」プロジェクトの概要

### (3) AELC の主宰および本学におけるハイブリッド実施

AELC (Asia Educational Leader Course) は、アジア地域における教育課題に国際的視座から取り組むマインドセットを涵養することを目的に、主宰する東北大学(本部局が統括事務局)を中心に東アジアの5大学が夏・冬ごと持ち回りで開講(30~45コマの英語授業)し、これら大学の学生が開講校に集まって受講するプログラムである。本年度の夏期コースは東北大学において8月16~27日にハイブリッド形式で実施し、十全な感染防止策のもと、学外フィールドワークを含む45コマの英語授業に32名の学生が参加した。一部の授業には高校生(宮城第一高校)13名も参加し、国際性教育の高大連携も試みた。参加した高校生からは「海外の大学院生との交流を通して、互いの国の教育の実情と課題について議論することができて有意義だった。」「学年を越え、学校を越え、国と言語を越えた交流が未来の教育のあり方そのものであると思う。」といった感想を得ている。また冬季コースは南京師範大学がホスト校となり、1月16~19日と2月1~9日にオンライン形式で実施し、45コマの英語授業に34名の学生が参加した。各期とも事前の予備学習(3回のPre-study)および研究発表会(AEL Forum)と併せ、参加学生の英語力・国際性・共同性などを涵養することができた。なお、AELCの単位化は本部局をはじめ多くの参画大学で実現する等、本プログラムは計画を上回って進捗している。なお、2023年度からは開催大学での対面実施を復活させる予定である。

・AELCパンフレット 2022-2023: <https://www.sed.tohoku.ac.jp/ireo/media/files/AEL2022-2023.pdf>



AELCパンフレット

- ・AELC 実施報告ウェブページ(2022 年度 夏期):  
<https://www.sed.tohoku.ac.jp/ireo/aelc/news/---id-107.html>
- ・AELC 実施報告ウェブページ(2022 年度 冬期):  
<https://www.sed.tohoku.ac.jp/ireo/aelc/news/---id-178.html>



AELC ハイブリッド開催(東北大学)の様子

#### (4) UNESCO との連携・学生インターンシップ

UNESCO バンコク事務所(アジア太平洋地域の教育・科学・文化的交流を担当)とは 2020 年 3 月に学術交流協定を締結した。本年度は、バンコク事務所の教育革新・能力開発課長である Dr. Libing Wang を招聘し、本部局が 12 月 17 日に主催した国際シンポジウム "Higher Education for A Just and Sustainable World 2" において基調講演をしていただき、また翌 18 日には「未来の教育と UNESCO」というテーマで Dr. Wang と本部局学生 10 名・高校生(宮城第一高校)10 名の交流会を開催し、「未来の教育とユネスコの役割」「国際機関でのキャリア形成」というテーマで英語討論を行った。本イベントについては、文教ニュース(1 月 30 日付)で報道されている。

- ・国際シンポジウムの実施報告ウェブページ:  
<https://www.sed.tohoku.ac.jp/ireo/news/detail/---id-163.html>
- ・本シンポジウムと交流会についての文教ニュース記事:  
[20230130 文教ニュース掲載.pdf](#)





国際シンポジウムの様子



UNESCO+高校生との交流会

本部長の大学院生1名が、5月25日～11月25日までの期間、新たに取り組みを行ったUNESCOバンコク事務所における長期インターンシップに(事前選考に採択され)ハイブリッド形式で参加した。とくに10月31日～11月25日は現地バンコク事務所における対面インターンシップに研究科長裁量による旅費支援を得て参加している。11月24日には、現地と東北大学をオンラインで接続し、留学や海外インターンシップに興味をもつ学生に向けて、インターン中の当該学生との交流会を開催した。

・UNESCO インターンシップ中間報告ウェブページ:  
<https://www.sed.tohoku.ac.jp/ireo/news/detail/---id-141.html>

・UNESCO インターンシップ交流会報告ウェブページ:  
<https://www.sed.tohoku.ac.jp/ireo/news/detail/---id-157.html>



UNESCO インターシップ学生と交流会の様子

UNESCOとの連携を強化するため、3月16～18日に、部局長他がバンコクを訪問した。UNESCOバンコク事務所での学術交流協定の更新、インターンシップ等の交流拡充に向けた実務調整などを行った。加えて、チュラロンコーン大学教育学部を訪問し、学生交流の拡大を目途に、協定締結に向けた準備を進めることができた。

#### (5) 清華大学とのSDGs教育に関する共同研究および教育実践

本部局と清華大学各部局とのマッチングファンド事業 "Promote Sustainability through Innovating University Teaching and Learning in East Asia" を2020年度から開始し、SDGs教育カリキュラムに関する共同研究や清華大学サマースクールへの本部局からの出講などの連携を深めてきた。その成果の一つとして、Asia Pacific Education Review (SCOPUS CiteScore 3.9) に本部局教員による論文 (Liu, J. et al. Vol.23, pp.695-710, 2022.) が掲載されている。また本年度は、8月5日～9月21日にかけて "Tohoku-Tsinghua Global SDGs Dialogue Series" として、6回(各回に東北大学と清華大学から1コマずつ出講)のオンライン講義 "Promoting Sustainability through Innovative University Teaching and Learning" を実施し、全世界から84名の参加者を得る等、本事業は順調に進捗している。

・東北-清華 Global SDGs 対話シリーズの紹介ウェブページ:  
<https://www.sed.tohoku.ac.jp/ireo/news/detail/---id-94.html>

**Tohoku-Tsinghua Global SDGs Dialogue Series**  
Funded by Tohoku University-Tsinghua University Collaborative Research Fund

**Promoting Sustainability through Innovating University Teaching and Learning**  
August 5- September 21, 2022  
Hosted by Graduate School of Education, Tohoku University

This dialogue series invite experts from Tsinghua University, Tohoku University and Miyagi University to introduce SDGs related issues, discuss research and share experience to explore innovation in university teaching and learning for a sustainable world.

Japan Time	Beijing Time	Theme	Tohoku University	Tsinghua University	
5-Aug	14:40-16:20	13:40-15:20	Education & SDGs	Dr. Yuki Watabe (Global Learning Center) Dr. Jing Liu (Graduate School of Education)	Dr. Zhou Zhong (Institute of Education)
25-Aug	14:40-16:20	13:40-15:20	Design & SDGs	Dr. Masashige Motoe (Graduate School of Engineering)	Dr. Xin Liu (Academy of Arts & Design)
2-Sep	14:40-16:20	13:40-15:20	AI & SDGs	Dr. Hideki Kozima (Graduate School of Education)	Dr. Keyang Tang (The Future Laboratory)
9-Sep	14:40-16:20	13:40-15:20	Environment & SDGs	Dr. Kazuyo Matsubae (Graduate School of Environmental Studies)	Dr. Xianlai Zeng (School of Environment)
16-Sep	14:40-16:20	13:40-15:20	Entrepreneurship & SDGs	Dr. Stephane Yu Matsushita (Graduate School of Engineering)	Dr. Zhanshuo Wang (Tsinghua University Youth Federation)
21-Sep	14:40-16:20	13:40-15:20	Wilderness & SDGs	Dr. Seiji Ozawa (Miyagi University)	Dr. Yue Cao (School of Architecture)

**Free Sessions for All**

Please click the link below to join the webinar:  
<https://us02web.zoom.us/j/87897937000?pwd=MTUprSVtR3BmFN3ZkxkaVVvUkNlMU3dpz09>  
 Passcode: 946280

For inquiries: Dr. Jing Liu at [jing.liu.e8@tohoku.ac.jp](mailto:jing.liu.e8@tohoku.ac.jp)

### 東北-清華 Global SDGs 対話シリーズ

#### (6) 国際シンポジウム・ウェビナーの開催

本年度は以下の国際シンポジウム・ウェビナー等を主催し、本部局の研究教育活動の国際的な展開および教育分野における本学の国際的なプレゼンスの発信を強力に推進している。なお国際ウェビナーの一部(ハイブリッド開催部分)は「社会にインパクトある研究」の活動として補助を受けている。

- 2022年9月17日 AEL Forum 2022 Summer: Exploring Breakthroughs for Future Education (AELC 参加学生の研究発表会): オンライン開催, 発表者 26 名。  
実施報告ウェブページ: <https://www.sed.tohoku.ac.jp/ireo/aclc/news/---id-115.html>
- 2022年11月26日 国際学術ウェビナーシリーズ 1: "Higher Education for A Just and Sustainable World 1 Transforming teaching and learning"。オンライン開催, 参加者人数: 累計 52 名。  
実施報告ウェブページ: <https://www.sed.tohoku.ac.jp/ireo/news/detail/---id-158.html>
- 2022年12月17日 国際学術ウェビナーシリーズ 2: "Higher Education for A Just and Sustainable World 2 Transforming teaching and learning in the Asia-Pacific Region"。ハイブリッド開催, 参加者 106 名。  
実施報告ウェブページ: <https://www.sed.tohoku.ac.jp/ireo/news/detail/---id-163.html>
- 2022年12月17日 国際シンポジウム 2022: 「アジアから発信する心理学: 社会的文脈とコミュニケーション」。オンライン開催, 参加者 約 30 名。



実施案内ウェブページ: <https://www.sed.tohoku.ac.jp/overview/information/detail--id-1104.html>

- 2023年2月18日 国際学術ウェビナーシリーズ 3: "Education and Caring for the Well-being of Youth in East Asia: Current issues, concerns and prospect". オンライン開催, 参加者 43 名。  
実施報告ウェブページ: <https://www.sed.tohoku.ac.jp/ireo/news/detail/---id-182.html>
- 2023年3月4日 国際学術ウェビナーシリーズ 4: "The Future Strengths of Young Researchers in Education: What are we doing? What will we do?". オンライン開催, 参加 43 名。  
開催案内ウェブページ: <https://www.sed.tohoku.ac.jp/ireo/news/detail/---id-181.html>
- 2023年3月11日 AEL Forum 2023 Winter: Graduate Programs in Education: A Comparison in East Asia (AELC 参加学生の発表会): オンライン開催, 参加 15 名。  
開催案内ウェブページ: <https://www.sed.tohoku.ac.jp/ireo/aelc/news/---id-183.html>



本年度に主催した主な国際シンポジウム・国際ウェビナー(フライヤー)



### (7) 研究者および学生の国際交流の拡大支援

**部局間交流協定** 本部局は海外の有力研究教育機関と19件の部局間学術交流協定を締結している。今年度は、下記の大学・国際機関との交流協定を更新した。これら交流協定は、教員による国際共同研究の促進だけでなく、学生間の交流(AELCによる国際共修、国際機関でのインターンシップ等)に多くの成果を上げている。

- 国立政治大学教育学院(台湾)
- UNESCO バンコク事務所(タイ)
- 国立インドネシア教育大学教育学部・大学院研究科
- 杭州師範大学経亨頤教育学(中国)

とくに UNESCO バンコク事務所はアジア太平洋地域を所管する国連専門機関であり、本部局の戦略的パートナーとして重視している。3月には部局長他が現地を訪問し、対面での交流協定更新式および種々の意見交換を行った。また、新しい交流パートナーとして、チュラロンコン大学教育学部を訪問し、研究者および学生の学術交流に向けた具体的な計画を話し合った。次年度には正式な部局間交流協定の締結を予定している。



左: UNESCO バンコク事務所での協定更新式 右: チュラロンコン大学での学術交流会

**研究の国際化** 教員による国際共同研究を促進するため、研究科長裁量経費による「国際共同研究推進事業」を公募し、本年度は下記の2件を採択の上、研究費・旅費・国際会議開催費などを支援している。

- アジア太平洋地域における「教育の新たな社会契約」の再構想(研究代表者: 劉 靖 准教授, 助成額 150 万円, 連携先: 東アジア・東南アジアの諸大学)
- 道徳的誇り(Moral pride)の文化差: 親の躾場面における日加比較研究からの検討(研究代表者: 長谷川 真里 教授, 助成額 150 万円, 連携先: トロント大学)

**国際学術誌への発表支援** 12月18日には「比較教育学に関する論文の国際ジャーナルへの投稿」という公開講座を開催し、国際学術誌 International Journal of Comparative Education and Development の編集長を務める Dr. Jae Park 氏から対面での解説をいただき、22名の参加を得た。また、前年度に引き続き本年度もロゼッタ社の高精度翻訳システム T-400 を全員分契約し、部局教員の英語による研究活動(英語による論文サーベイ、英語による論文執筆)を活発化させている。

**教育の国際化** 大学院での英語講義 "International Education and Development" では、清華大学教育研究院との共同授業を企画・実施した。両大学院の学生13名がオンラインで参加

し、グループワーク等を通して英語コミュニケーション能力・チームワーク・合意形成力などを涵養することができた。



東北・清華の共修授業 International Education and Development

**本部局からの海外留学の支援** 本部局学生の海外留学を促進するために、本年度は、日本学生支援機構(JASSO)による海外留学支援制度(協定派遣)に「エンゲージド・ラーニングによる持続可能なアジアのための教育リーダー育成プログラム」を提案し、来年度分の学生旅費(48名分、312万円)について採択を得た。これは学部レベルの Early-exposure プログラムから始まり、主に修士学生を対象とした AELC 国際共修コースへの参加、そして主に博士学生を対象とした国際フィールドワーク等を、現地・対面により実施することを目指すものである。

### JASSO 海外留学支援制度 (協定派遣) 案

**エンゲージド・ラーニングによる持続可能なアジアのための教育リーダー育成プログラム**

アジアにおける教育諸課題に学生が主体的・実践的に取り組むエンゲージド・ラーニングを本プログラムは提供する。育成する人材は、持続可能な発展のための教育という視座を備え、自ら課題を発見・分析し、その解決に参画するマインドセットを持った教育リーダーである。そのために東北大学教育学部・大学院教育学研究科が中心となり、大学間・部局間学生交流協定のあるアジアの複数大学・国際機関によるコンソーシアムを形成し、本プログラムを推進する。継続的な学びを重視する本プログラムは、①アジアにおける教育諸課題を体験的に理解する「Early Exposure for Engagement (学部)」、②主体的な取り組みに向けた資質・能力を修得する「KASP (Knowledge, Attitude, Skills & Practice) for Engagement (学部4年と大学院)」、③国際フィールドワークを含む具体的な研究実践となる「Practical Research Engagement (主に大学院)」から構成される。いずれの段階も、事前共同学習、対面共同学習(協定校での講義・演習、現地フィールドワーク、国際機関等でのインターンシップ等)、事後検討および学生フォーラムでの発表を組み合わせ、すべて英語により実施する。加えて、段階ごとの単位化と成績評価など質保証の枠組みを整備する。本プログラムを修了した人材は、主体的なエンゲージメント能力と多文化環境への適応能力、社会的諸課題に対する解決能力を修得することが想定され、日本およびアジア諸地域の教育機関、国際機関等において教育リーダーとなることが期待される。

派遣人数：年48人月 派遣先：中国、韓国、台湾、タイ  
北京師範 高麗大学 政治大学 チュル/UNESCO

学部2~4年 「海外教育演習」	<b>入門編</b> 年12人月 Early Exposure の経験
学部4年~修士/博士 「国際実践研究 I / II」	<b>発展編</b> 年12人月×2期 KASP 修得による主体的取組
修士/博士 「国際教育共同実習」	<b>研究編</b> 年12人月 具体的な研究実践/社会貢献

**事前共同学習** 教育課題の講義 知識/技能の修得 (オンライン活用) 動機づけ・使命感 基本スキルの涵養

**対面共同学習** 協定校に集合し 対面講義受講 フィールド調査 異文化協働 自己効力感

**事後学習** 検討・分析 論文/プレゼン フォーラム発表 研究実践力 教育リーダー

#### JASSO 採択プログラムの概要

















**留学生の受入の支援** 海外から優秀な学生を選抜するために、本部局では「国際交流支援室」にて、留学希望者の基礎学力評価(出身大学・学部の入試レベル、学業成績などから推定)と日

本語能力評価(オンライン面談)を実施し、受入教員に代わって基本的な調査を行うサービスを提供している。これにより、メール等での留学希望者からの問い合わせへの一貫した対応ができ、また教員の研究時間の確保にも役立っている。本年度は43名の留学希望者に対応した。また、協定校からの留学についても支援を行っており、本年度は南開大学(中国)から1名の学生の受入支援を実施している。

**留学生の学修支援** 本局では「国際交流支援室」を通して、現在60名を超える部局留学生に対する生活・学修の相談および具体的支援を行っている。留学生(学部研究生を含む)に対する日本語支援として、仙台地域のボランティア(教員経験者等)6名の協力のもと毎週金曜の13～16時に(今年度は主にオンライン形式にて)日本語アカデミックライティング指導等を行っており、本年度はのべ117名の留学生に対して合計773ページの文章添削および74ページのスライド添削を行った。このような日常的な相談・支援業務のほか、本年度は以下のイベントを開催した。

- 新入留学生オリエンテーション(春4/18・秋10/7): 留学生17名に対して教員5名から生活上・学修上のアドバイス・相談等をオンラインで行った。
- キャリア形成に関する相談会(10/30): 留学生9名と本学出身の元留学生6名のあいだで就職・進学等のキャリアデザインに関する懇談・相談等を行った。

**高大連携の国際化** 本局における国際共修プログラムおよび国際シンポジウムなどに、教育の国際化に関心をもつ高校生(宮城第一高校)に参加してもらい、本局の大学院生や招聘講師らとの交流してもらうことで、高大連携の国際化を図った。その一部は(4)UNESCOとの連携の欄に「未来の教育とUNESCO」というテーマでUNESCOから招聘したDr. Wangと本局学生10名・高校生(宮城第一高校)10名の交流会を開催した旨を記載している。これに加えて(3)AELCの欄に、一部の英語授業には高校生(宮城第一高校)13名も参加し、国際性教育の高大連携も試みた旨を記載している。

 [AELCパンフレット表紙.png](#),  [国際シンポジウム1217写真.png](#),  [UNESCOインターンシップ.png](#),  [UNESCO交流会.png](#),  [AELC-SC2022.png](#),  [AEL-Forum-SC2022.png](#),  [2023総長裁量経費要求書\(教育学研究科\).pdf](#),  [20230130文教ニュース掲載.pdf](#),  [国際学位コースのパンフレット.png](#),  [清華・東北 DialogueSeries案内.png](#),  [JASSO協定派遣の概要.png](#),  [JASSO協定派遣の概要.png](#),  [グリーン劉准教授.png](#),  [IntlEduDev東北清華共修授業.jpg](#),  [webinars.jpg](#),  [UNESCO+CHULA.png](#)

---



## 2. 心理支援事業の多角的な展開と社会に向けた推進

「社会との共創」

No.06 (2)-4 「社会とともにある大学」としての社会連携の強化

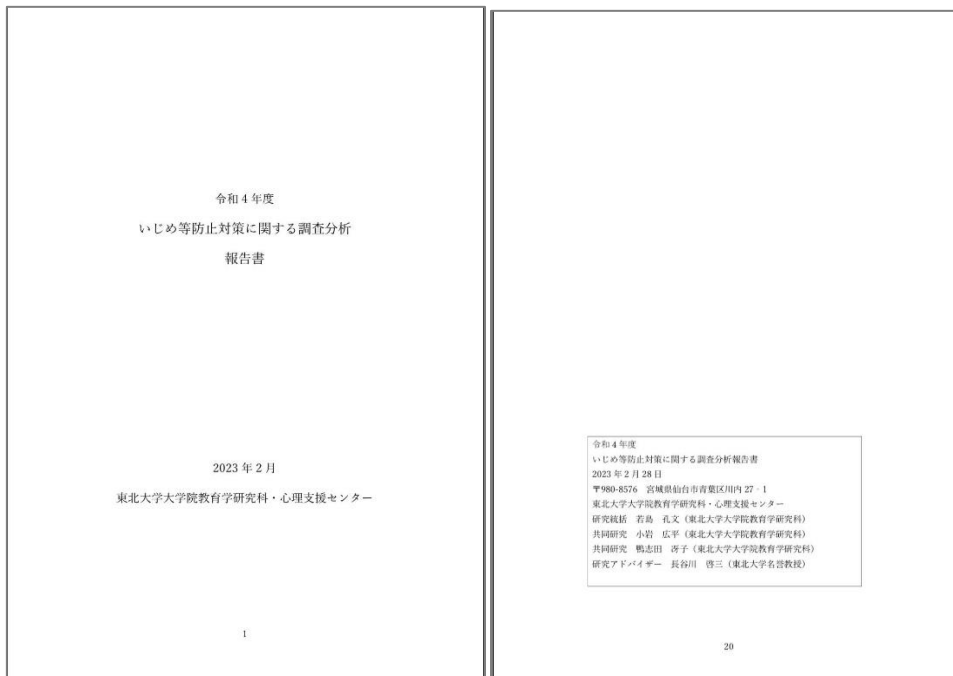
### 実績報告

#### 1. 心理支援センターにおける事業

##### (1) 受託事業

令和3年度(プロジェクトコード:J210002954 プロジェクト名:R3 いじめ等防止対策に関する調査分析業務)に引き続き、令和4年度においても、宮城県教育委員会との受託事業契約の締結をした(プロジェクトコード:J220001254 プロジェクト名:R4 いじめ等防止対策に関する調査分析業務)。2018(平成30)年8月21日に、宮城県内の高等学校生徒の自死事案が発生し、同年10月31日に、宮城県知事と宮城県教育長に対して第三者委員会による調査の要望書が提出された。これを受けて、同年12月19日に宮城県教育委員会教育長による宮城県いじめ防止対策調査委員会への諮問があり、特別部会が設置された。その最終的な調査報告書の提言において、学校の教員間等の連携に関する研究が必要とされ、それを受けて宮城県教育委員会に協力し、心理支援センターにて研究を進めることとなった。令和5年2月28日に調査分析の最終の報告書を提出した。

こうした特別部会の提言のあと、その課題を解決するために、実際に研究を進め、調査分析をし、その成果を宮城県に戻すという作業は、国内ではほとんど行われていない試みであり、たいへん重要な歴史を刻んだものである。



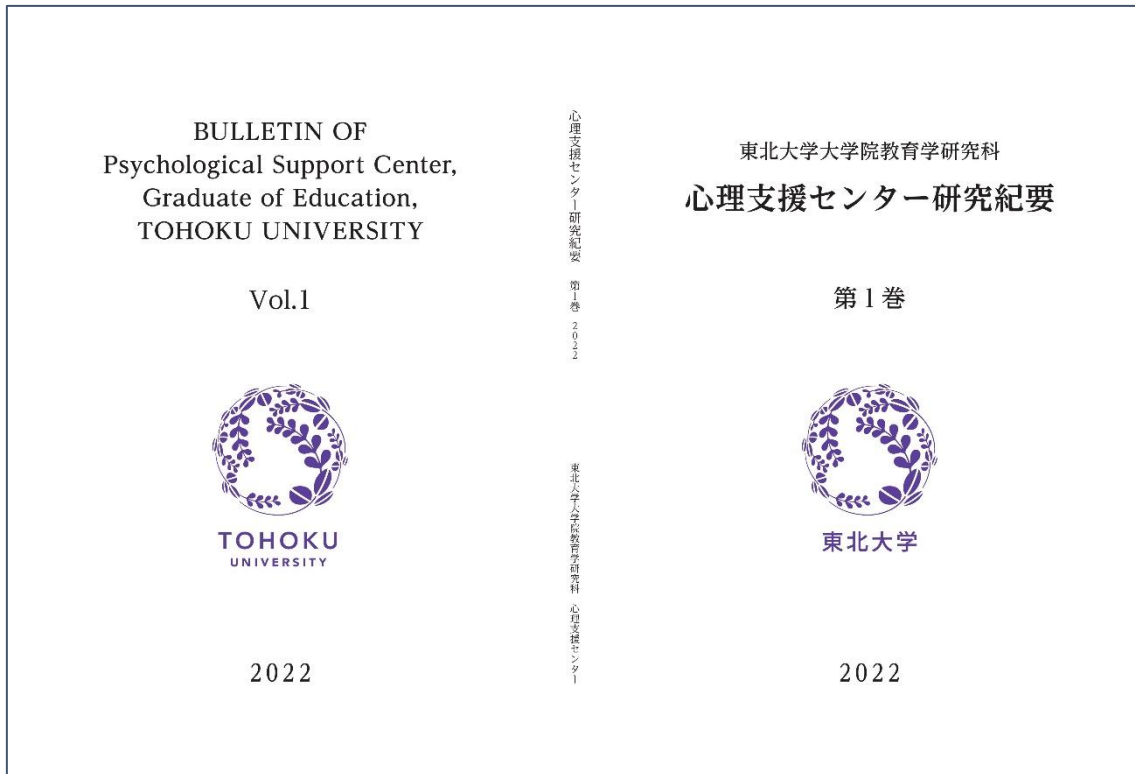
[いじめ等防止対策調査報告書\\_表紙.pdf](#)

[いじめ等防止対策調査報告書\\_奥付.pdf](#)



(2)『心理支援センター研究紀要』の創刊

心理支援センターでは、各相談室の研究および実践の成果を報告する媒体として、『心理支援センター研究紀要』創刊号を発刊した(2022年5月)。『臨床心理相談室紀要』は20年発刊を続けてきたが、統合するかたちとなった。



[心理支援センター研究紀要.pdf](#)

(3)心理支援センターによる研修会の後援・講師

中国 西南大学心理学部主催(西南大学心理学部カウンセリング研究・研修センター運営、International Academy of Family Psychology[国際家族心理学会]後援)のオンライン・ワン・デイ・ワークショップの心理支援センターによる後援、および研修講師を心理支援センターにて担当した。参加者は約200名。

研修講師 若島孔文

テーマ 「スリー・ステップス・モデルー井上円了と森田正馬の研究から学ぶブリーフセラピー」

日時 2023年1月8日(日)10:00～17:30

(4)その他

心理支援センターは、臨床心理相談室、災害心理支援室、発達・学習心理相談室の3つの相談室から構成されており、以下において、それぞれの相談室の業務と成果を報告する。

## 2. 臨床心理相談室

臨床心理相談室は、職場や生活でのストレスや葛藤を持つ人々やその家族に対して、心理査定を含めた臨床心理面談を実施し、地域社会に貢献するとともに、臨床心理士及び公認心理師の養成のための内部実習機関である。来談者の相談内容には不登校、家族関係、健康問題など現代的かつ切迫した課題が扱われており、コロナ禍にもかかわらず面接回数が一定程度記録されていることから、臨床心理士及び公認心理師の養成のための内部実習機関本相談室として機能し、また、地域社会に大きく貢献していることがわかる。

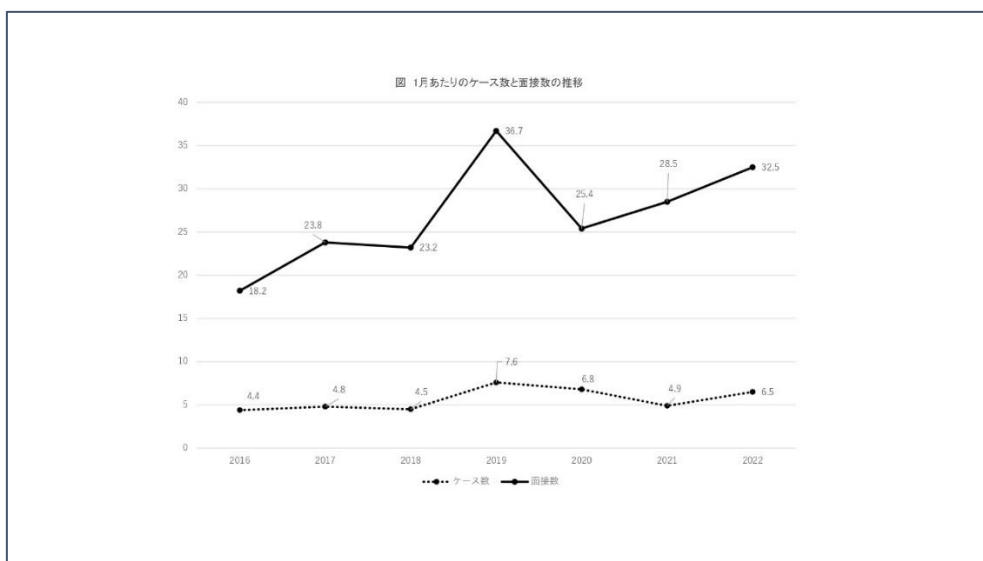
令和4年度は covid-19 感染拡大防止に最大限の配慮をしながら、相談事業を継続した。主な感染防止策は以下のとおりである。

- ・相談員と来談者の自覚症状のチェック
- ・相談員の検温
- ・相談室におけるパーティションの設置
- ・相談後の机、ドアノブなどのアルコール清拭。部屋の換気

相談の手続は例年通りである。具体的には、教員が受理面接を行い、その後、受理会議を開催する。受理となった場合、相談を担当する相談員を院生から募り、担当を決定する。相談員はスーパーバイザーを教員から一人を定め、その指導監督のもと面接を実施する。面接の経過はコース担当全教員が参加するケースカンファレンスで定期的に検討される。

面接の形態には、オンライン面接も可能であるよう整備されたが、R4年度の面接はすべて対面で行われた。

令和4年度は主として博士課程前期1年の18名、同2年の16名が相談員として活動し、2月末までのケース数は72件、面接数は357回であった。ケース数と面接数を月平均に換算した過去7年間の実績は下図にまとめた。コロナ禍以前の水準まで回復していることが見て取れる。



[臨床心理相談室\\_data.pdf](#)

## 3. 災害心理支援室

災害心理支援室は、震災子ども支援室(Sチル)から資料および連携機関を引き継ぎ、(1)災害遺族支援・災害里親支援、(2)緊急支援・被災者支援、(3)災害心理教育を行う。

令和3年度(2021年6月)に震災復興住宅で暮らす住民との意見交換会を実施した。震災復興住宅で暮らす住民との意見交換会の後、仮設住宅から現在に至るまでの状況の変化とそれに伴う問題について、2時間のインタビューが行われた。その報告を、『心理支援センター研究紀要』(創刊号)に掲載した(坂本一真・若島孔文 2022 宮城県の災害復興仮設住宅における困難とソーシャルネットワークの創出プロセスに関する考察 東北大学大学院教育学研究科心理支援センター研究紀要, 1, 27-31)。

次に、北海道、東北、東南海地方における地震災害時の心理社会的支援に関わるネットワークの構築を目的とした協議を令和3年度に開始し、令和4年度は2回にわたるオンライン会議、2回にわたるメールでの審議を行い、令和5年度から5回にわたる災害心理支援に関するセミナーを実施し、セミナー修了者に修了認定書を与えていくことを決定した。本会議の参加者は、災害心理支援を専門とする研究者・臨床家の在籍する以下の大学の教員・研究者・実践家である。室蘭工業大学、北海道教育大学、岐阜大学、名古屋大学、香川大学、徳島大学。さらに、平常時において、災害心理教育について考え、学校や地域社会に啓蒙していく際に協働していくことが協議されている。この協議は引き続き継続して行われる。

自然災害および新型コロナウイルス感染に関する心理学的影響に関する研究として本年度では以下が公表・報告・講演された。

## 研究論文

1) Sakai, M., Nakanishi, M., Yu, Z., Takagi, G., Toshi, K., Wakashima, K., & Yoshii, H. 2022 Depression and anxiety among nursing students during the COVID-19 pandemic in Tohoku region, Japan: A cross-sectional survey. *Japanese Journal of Nursing Science*, e12483, <https://doi.org/10.1111/jjns.12483>

2) Kamoshida, S., Nihonmatsu, N., & Wakashima, K. 2022 The relationship between family variables and family social problems during the COVID-19 pandemic. *Plos One*, <https://doi.org/10.1371/journal.pone.0270210>

3) Nakanishi, M., Sakai, M., Takagi, G., Toshi, K., Wakashima, K., & Yoshii, H. 2022 Association between COVID-19 Information sources and stigma against healthcare workers among college students: A cross-sectional observational study. *JMIR Formative Research*, 6(7), <http://dx.doi.org/10.2196/35806>

4) Koiwa, K., Wakashima, K., Ikuta, M., Asai, K., & Takagi, G. 2022 Fear of COVID-19 infection and related factors in Japan: A comparison of college students, pregnant women, hospital nurses and the general public. *Plos One*, <https://doi.org/10.1371/journal.pone.0271176>

5) 坂本一真・若島孔文 2022 宮城県の災害復興仮設住宅における困難とソーシャルネットワークの創出プロセスに関する考察 東北大学大学院教育学研究科心理支援センター研究紀要, 1,

27-31.(Wakashima, K. & Sakamoto, K. 2022 Difficulties in temporary housing for disaster recovery in Miyagi prefecture and the process of social network creation. Bulletin of Psychological Support Center, Graduate of Education, TOHOKU UNIVERSITY, 1, 27-31.)

6)坂本一真・春山蘭乃・関 芙美・内山彩香・若島孔文 2022 家族療法・短期療法の視点を導入した災害心理教育コンテンツ開発 東北大学大学院教育学研究科心理支援センター研究紀要, 1, 33-44.(Sakamoto, K., Haruyama, R., Seki, F., Uchiyama, A., & Wakashima, K. 2022 Development of disaster psychological education programs from the perspective of family therapy and brief therapy. Bulletin of Psychological Support Center, Graduate of Education, TOHOKU UNIVERSITY, 1, 33-44.)

7)二本松直人・櫻庭真弓・鴨志田冴子・若島孔文 2022 家族療法・短期療法の視点を導入した新型コロナウイルス感染症に関する災害心理教育コンテンツ開発 東北大学大学院教育学研究科心理支援センター研究紀要, 1, 45-54.(Nihonmatsu, N., Sakuraba, M., Kamoshida, S., & Wakashima, K. 2022 Development of disaster psychological education content on COVID-19 using the perspectives of family therapy and brief therapy. Bulletin of Psychological Support Center, Graduate of Education, TOHOKU UNIVERSITY, 1, 45-54.)

8)櫻庭真弓・佐藤嘉紀・大泉珠希・高橋菜央・石垣那実・内山彩香・榎戸晨乃・嘉瀬正之・関 芙美・春山蘭乃・藤原成深・若島孔文 2022 新型コロナウイルス感染症をめぐる海外と日本における社会状況の変化—2021年2月からの1年間の報告— 東北大学大学院教育学研究科心理支援センター研究紀要, 1, 117-137. (Sakuraba, M., Sato, Y., Oizumi, J., Takahashi, N., Ishigaki, N., Uchiyama, A., Enokido, S., Kase, M., Seki, F., Haruyama, R., Fujiwara, N., & Wakashima, K. 2022 The change of social conditions with COVID-19 overseas and in Japan: A report from February 2021 to February 2022. Bulletin of Psychological Support Center, Graduate of Education, TOHOKU UNIVERSITY, 1, 117-137.)

#### 学会でのシンポジウム

1)浅井継悟・戸田さやか・平泉 拓・高木 源・小林大介・小岩広平(話題提供者)・若島孔文(指定討論者)・浅井継悟(司会者) 2022 公募シンポジウム [SS-039] 新型コロナウイルス感染の恐怖感—初めての緊急事態宣言から解除後の時期に着目して— 日本心理学会第86回大会発表論文集, p.130.(2022.09.08-11, 日本大学, オンライン開催)

2)Wakashima, K.(Chair, Discussant), Ikuta, M.(Discussant), Nihonmatsu, N., Sakamoto, K., & Takagi, G.(Speakers) 2022 Symposium: Psychoeducation in Disasters. The 9th Conference of International Academy of Family Psychology (October 10, 2022, Munich, online)

3)Wakashima, K.(Chair, Discussant), Ikuta, M.(Discussant), Kamoshida, S. & Kobayashi, D., Asai, K., & Koiwa, K.(Speakers) 2022 Symposium: Family Changes in the COVID-19 Pandemic.The 9th Conference of International Academy of Family Psychology (October 11, 2022, Munich, online)



学会主催の講演

1) 若島孔文 日本心理学会・認定心理士の会 公開セミナー・オンライン「災害に向けたこころの準備」2023年2月19日(日)13:00~14:30

日本心理学会 認定心理士の会 認定心理士の会公開セミナー

## 災害に向けたこころの準備

2023年2月19日(日)  
13:00~14:30 (12:50開場)  
オンライン開催 (Zoom)

参加費無料  
事前申込制  
(定員1,000名)

講師  
若島 孔文先生  
(東北大学大学院教育学研究科、同災害心理支援室室長)

司会：前田 駿太 (東北大学大学院教育学研究科)

参加方法  
認定心理士の方に限らず、どなたでもご参加いただけます。  
Zoom Video Conferenceにアクセスすることをご参加いただけます。録画・録音はご遠慮ください。  
※インターネットに接続しているパソコン、タブレット、またはスマートフォンが必要です。  
※通信料は参加者負担となります。

申込方法  
日本心理学会ホームページの「認定心理士の会イベント」にてご案内しておりますZoomウェビナーのURLにアクセスし、申し込み期日までに、必要事項を「事前登録」してください。登録後「確認」メールが届きますので、当日は確認メールの「ウェビナーに参加」よりご参加ください。  
申し込みサイト： <http://psych.or.jp/authorization/ninnokai-event/>  
申込締切：2023年2月19日 (日)

主催 / 公益社団法人日本心理学会 認定心理士の会  
お問い合わせ / 公益社団法人日本心理学会 認定心理士の会 (e-mail: [jpa-ninnokai-event@psych.or.jp](mailto:jpa-ninnokai-event@psych.or.jp))

[認定心理士の会セミナー災害に向けたこころの準備.pdf](#)

#### 4. 発達・学習心理相談室

企業研修のコンサルテーション: 6月に依頼を受け9月に企業研修1件を発達・学習心理相談室を通じてコンサルテーションを実施した。コンサルタントとして、神谷哲司教授が担当した。損害保険ジャパンより、感情労働を研究テーマとする教員に研究内容に関する問い合わせがあり、コンサルテーションを行った結果、同社のクリエイティブ会議での研修の実施につながった。

発達・学習心理相談室では、「いじめ問題とその対策」というテーマで2回にわたるオンラインセミナーを実施した。

第1回 令和5年1月6日(金)18時30分から21時

「発達障害といじめ」というタイトルで、吉川 徹先生(愛知県医療療育総合センター中央病院子どもこころ科児童精神科部長)にご講演いただいた。参加者:事前登録 250人、実参加者 200人。

企画をセンター長ならびに川崎聡大室長(発達・学習支援室)が行い、東北地区、特に仙台において他地区に比して立ち遅れている発達障害といじめに関する理解について、専門家の支援やその在り方について問う講演・ディスカッションを行った。開催公開1週間で全国から当初の予定を大きく上回る参加者希望を得た。参加内訳は専門職支援者、研究者、保護者と幅広い層からの参加を得た。



東北大学心理支援センター主催セミナー

## いじめ問題とその対策

オンライン開催(無料)

**第1回**  
**2023年1月6日(金)**  
18:30~20:30

**講師:吉川徹先生**  
(愛知県医療療育総合センター中央病院  
児童精神科部長)

**第2回**  
**2023年2月17日(金)**  
18:30~20:30

右のQRコードまたは  
<https://forms.gle/xxfb52qccKDA9AyV8>  
よりお申込み下さい



(主催)東北大学心理支援センター  
お問い合わせ: [psicologia.tu@gmail.com](mailto:psicologia.tu@gmail.com)

いじめ問題とその対策セミナー\_20230106.pdf

第2回 令和5年2月17日(金)18時30分から21時

「空気といじめ」というタイトルで、小岩広平氏(東北大学大学院教育学研究科博士後期課程)、「いじりの中に潜むリスクとその対応」というタイトルで、坂本一真氏(東北大学大学院教育学研究科博士後期課程)にご講演いただいた。企画をセンター長ならびに東北大学大学院教育学研究科博士後期課程の櫻庭真弓氏が行い、近年問題となっているコミュニケーション系のいじめについての理解を深め、専門家の支援やその在り方について問う講演・ディスカッションを行った。参加者:事前登録を170人に制限、実参加者121人。

東北大学心理支援センター主催セミナー

## いじめ問題とその対策


オンライン開催(無料)

第2回  
2023年2月17日 18:30 ~ 20:30

講師:坂本一真 先生(東北大学大学院教育学研究科)  
小岩広平 先生(東北大学大学院教育学研究科  
/日本学術振興会)

講演内容  
現代の学校現場では、「いじり」と呼ばれる、遊びの形を用いたいじめが問題視されています。また、「空気の読み合い」が求められる現代社会では、「空気」をきっかけとしていじめが発生しやすくなっているという指摘もあります。今回の講演では、これらの「現代的ないじめ」をテーマとし、いじめが発生する要因や、その対応策について、最新の心理学知見をふまえてお伝えいたします。

右のQRコードまたは、  
<https://forms.gle/NCqxrLdLXs6G4upx8>  
よりお申込みください。



(主催) 東北大学心理支援センター

[いじめ問題とその対策セミナー\\_20230217.pdf](#)

アンケート結果は、「満足」とするものが多く、以下のようなコメントが寄せられた。

<第1回アンケートのまとめ>

- ・発達障害者が加害者側になるという前提がなかったので、学びになった。
- ・加害者を排除しない支援体制の構築。
- ・発達障害といじめの関係が具体的にわかり、一般的な見方が出来なかつたり、興味が風変わりだつたり集団と少し違うといった事が影響していることを改めて感じた。
- ・発達障害の子への具体的な支援方法がわかった。
- ・忘れることが苦手だつたり計画を立てて、立てた計画通りに進めることが難しい、「将来」の褒美が魅力的に感じられない等、周りの配慮が必要だと強く感じた。
- ・発達特性のある子供の言動を他の子どもに説明しつつ、いじめ加害者でも傍観者でもない立ち位置になってもらえるよう促す言葉かけは、子どもの発達段階のアセスメント無しには出来ない高度なものだと思った。
- ・ASD が社会的動機付けの障害であるということ。ADHD ではネガティブ体験が増えやすく消えにくいこと。神経発達症等個々の特性理解と対応がいじめをなくすことにつながる。
- ・「みんなが一緒」をやめ、特別支援教育の推進について、他の子どもの保護者を巻き込む。
- ・発達障害と「いじめ」の背景や、予防方法がわかりやすく学べた。
- ・とても現実的な視点でお話しいただき、大変参考になった。
- ・子どもを巻き込む声かけなど、現場で役に立つ知識が多かった。
- ・具体的な支援方法を示していただいたことで、現場での活用の仕方をより明確にイメージすることが出来ました。
- ・発達障害がなぜいじめに結びつくのか、という点が具体的に指摘されており、実際の支援に有用だと感じました。今まではただ漠然と「対人的な相互関係が難しいから」と理解していたが、どのような特徴がいじめの加害、被害に関連するのか知ることができた。
- ・学校現場で発達障害の子どもに関わる際のポイントが多くあった。
- ・講演後のディスカッションで、どのライフステージにおいても核とすべき ASD のコミュニケーション支援の視点にも触れられており有意義なセミナーであった。










<第2回アンケートのまとめ>

- ・空気を読むという圧力が発生しやすい条件やいじりが発生しやすい条件を詳しく知ることができ、それを踏まえて実践の場でどのように対応したら良いかを考えられた。
- ・学校で過ごす子どもへの対応のアドバイスが具体的にほしかったので、研究結果をもとにそれぞれ話していただけたことはありがたかった。
- ・空気とは何か、いじりの光と影といった普段よくよく考えていないことをしっかりと振り返ることができた。
- ・臨床に基づいた研究を聞かせていただけるまたとない機会を得、お二人の先生の論文も読んで、自分の考えを言語化していきたいと考えた。
- ・空気が読めないという現象といじりの影の側面の影響を知り、いじめに発展する構造が良く理解できた。
- ・具体的ナリスクファクターを知れたことで、SCの現場でのアセスメントに明日からでもすぐに役立つと思った。
- ・空気が読めない子どもたちへのアプローチの仕方、いじりについての大人の関わり方、ケアの仕方など非常に学び多いことばかりだった。
- ・教育現場での日常を観察することの重要性が分かった。
- ・空気を読むことについて、心理教育に盛り込もうと思った。
- ・『空気を読む』という曖昧なことを具体的に知れた。
- ・いじりについてもパターンが具体的で考えやすかった。
- ・多様性からの島宇宙という考えがとても今の教室を理解するのに役立った。
- ・とても理解しやすかった。実際に関わっている生徒の隠れている部分の理解へ繋がった。

5. さいごに

心理支援センターは、上述のように、各相談室がその目的を達成するために、様々な計画を立て実施し、その成果・実績をあげるとともに、今後の展開のための土台を着実に構築しているところである。その成果としては、臨床心理相談室はコロナ禍における影響を最小限にとどめ、過去年度と遜色がない公認心理師・臨床心理士養成のための実践的教育訓練を前年度同様に引き続き行った。災害心理支援室は、平常時における災害心理教育マニュアルの普及、緊急時のための大学間ネットワークの構築を進め、来年度から災害心理社会支援の専門家の養成を目指す。発達・学習心理相談室は、インクルーシブな協働社会を目指す様々な専門家に対するセミナ

一を実施し、高い評価を得ている。これらの多角的展開はまだはじまったばかりであり、社会に向けたさらなる成果・実績が期待できるものと考えている。

 いじめ等防止対策調査報告書\_表紙.pdf,  いじめ等防止対策調査報告書\_奥付.pdf,  心理支援センター研究紀要.pdf,  いじめ問題とその対策セミナー\_20230106.pdf,  いじめ問題とその対策セミナー\_20230217.pdf,  臨床心理相談室\_data.pdf,  認定心理士の会セミナー-災害に向けたこころの準備.pdf

### 3. 教育リーダー育成事業を中心とした地域との連携事業

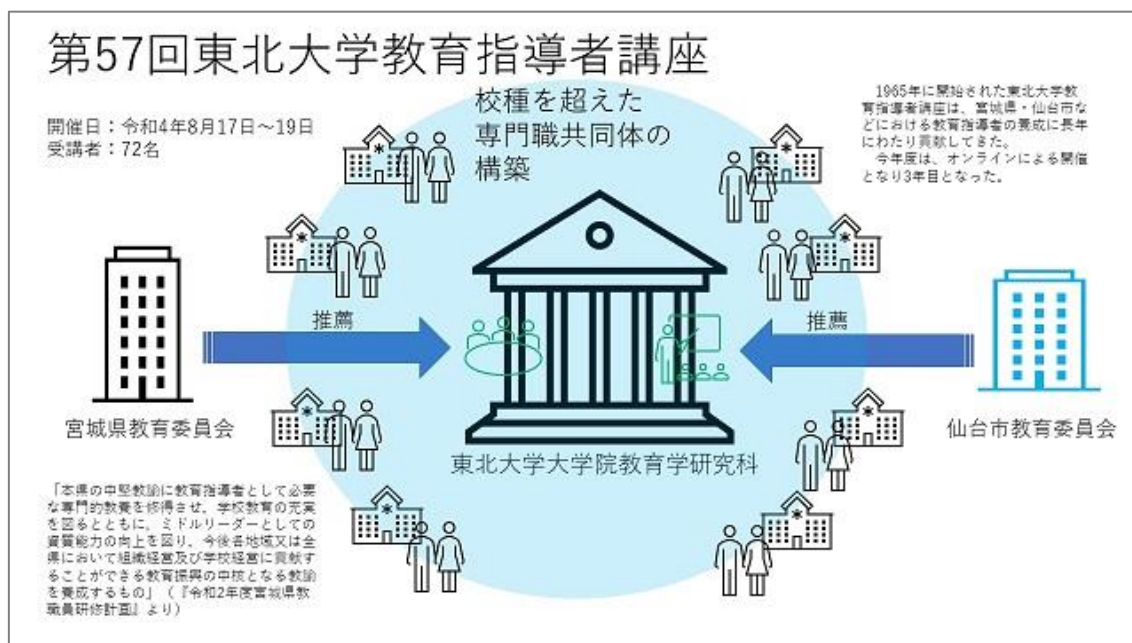
「社会との共創」

No.06 (2)-4 「社会とともにある大学」としての社会連携の強化

#### 実績報告

【教育指導者講座】

教育指導者講座は、宮城県内の幼稚園から高等学校までの全教員を対象として、教育学の最先端の知見を提供するとともに、校種を越えたネットワークの構築を図ることを目的としている。本講座は、昭和40年に始まり、東日本大震災の年を除いて50年以上にわたり毎年開催されてきた。宮城県および仙台市の教育委員会では本講座が教育リーダー育成における重要な研修機会として位置づけられている。



令和4年度は8月17日～19日の3日間、オンラインにて本講座を開催し、72名の教員が参加した。終了後の受講者アンケート(N=71、4件法、無記名)によると、講義に対しては「満足できた」74.6%、「ある程度満足できた」23.9%、ワークショップに対しても「満足できた」84.5%、「ある程度満足できた」15.5%となっている。すなわち、本講座への評価は極めて高く、講義・ワークショップともに「満足」「ある程度満足」を合わせると100%に近い結果となっている(『第57回 東北大学教育指導者講座記録』令和5年3月刊行予定)。」

本講座の参加者からは、講座終了後、以下のような感想が出されている。

PCの操作上での問題が発生した際に、すぐに対応していただいたので、安心して講座に臨むことができました。オンラインでの講座に不安がありましたが、無事に受講することができ、嬉しく思います。事務局の先生方、本当にありがとうございました。

充実した研修に参加させていただきありがとうございました。だからこそ、より強く感じたのは、講話・ワークショップを通して対面での研修だとより内容が濃くなったと感じることで、このコロナ禍の状況であることを残念に思います。ただ、それでも勉強にもなり、自身の考えを深めることができたと思います。現場に持ち帰って、今回の研修を踏まえて、これからも職務に励んでいきたいと思いました。

3日間の研修でしたが、あっという間に時間が過ぎました。講座では新たな知識を得ることができ、ワークショップでは、最終日には、同グループの仲間と楽しく率直に意見交換ができるようになり、有意義な時間を過ごすことができました。このような機会をいただきました、後藤先生をはじめ、事務局の皆様、講義をいただいた先生に感謝いたします。ありがとうございました。

3日間たくさんの学びがあり、頭がいっぱいです。これから整理して実践に生かしていきたいです。zoomで話す機能以外のことをするのが初めてだったのですが、トライアル講座でご指導いただいたおかげで3日間、スムーズに参加することができました。ありがとうございました。

大変学び多い3日間となりました。現在の状況では、オンライン開催に賛同するのですが、やはり対面実施によって、参加メンバーとの関係性がより深まったのではないかと少し残念な気持ちもあります。しかし、多様な講義内容とグループディスカッションにより、今後の教師としての在り方に大きな影響を与えてくれるものでした。この3日間の学びを現場で活かし、繋がった先生方と手を携えながら、子供たちや宮城の教育の未来に少しでも尽力していきたいと思えます。3日間、本当にありがとうございました。

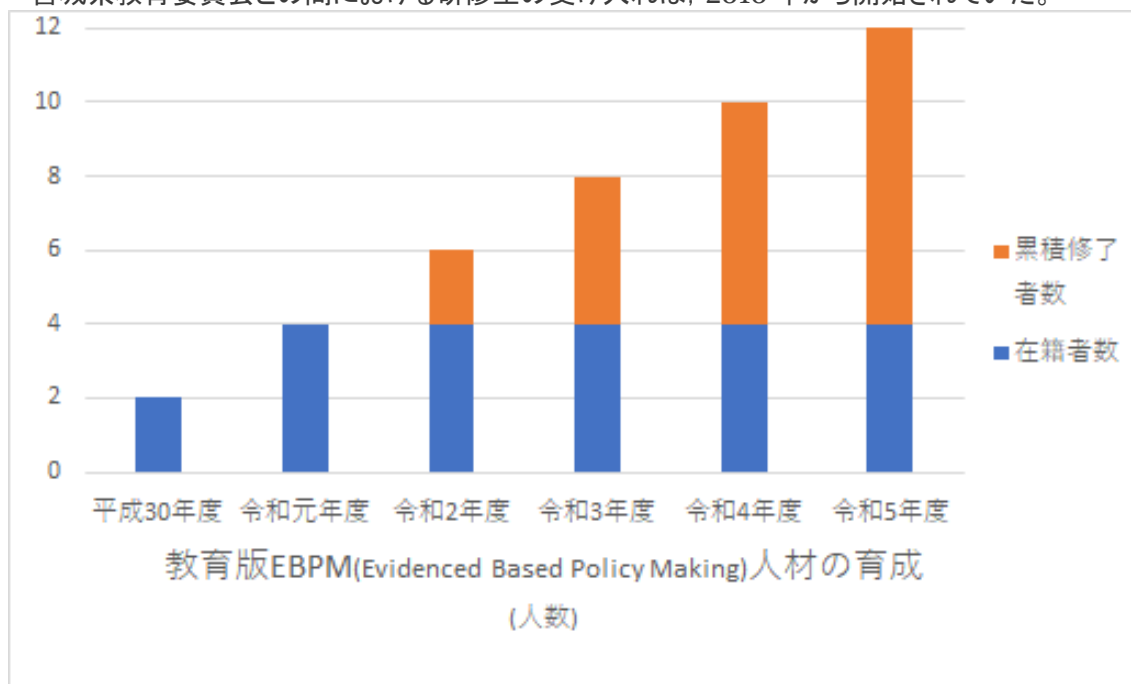
今回の講座に参加できたこと、本当に感謝しかありません。講座の内容も刺激になりましたし、異校種の先生方と話す機会が貴重であり、これまでの教育活動を顧みることができました。リモートでの講座になり、残念ではありましたが、リモートだからこそ感じることもでき、充実した3日間でした。改善点はありません。講座担当してくださった先生方、ワークショップで関わっていただいた先生方、これからもよろしくお願いします。

とても充実した3日間となりました。そして地方に住んでいるので、オンラインで3日間行っていただけて有難かったです。事務局の先生方は、接続関係で不具合があったときもすぐに対応していただき大変助かりました。本当にありがとうございました。

【教育版 EBPM】

平成 30 年度から宮城県教育委員会との連携のもと教育版 EBPM (Evidence Based Policy Making) 人材の養成を行っている<sup>1)</sup>。平成 30 年度から宮城県教育委員会教職員課との連携の下で、県教委が学費を負担するスキームの下、研究科に現職教員 2 名を正規大学院生として博士課程前期に受け入れを開始し、計量分析力を基盤として質的研究、規範的研究の三位一体の教育を行っている。令和 5 年度には新たに 2 名の正規大学院生として博士課程前期に受け入れる予定である。受け入れ人数の推移(累積), 修了生の修士論文の題目並びに修了生の声について以下に示す。

1) 宮城県教育委員会との間における研修生の受け入れは、2010 年から開始されていた。



### 派遣院生の研究テーマ

- 2019年度修了
  - ・ 学校の指導が学力に及ぼす効果—全国学力・学習状況調査宮城県データの二次分析を通して—
  - ・ 学習者の学びを教師の振り返りに活用するための計量テキスト分析
- 2020年度修了
  - ・ 学校規模・学級規模が小中学生の不登校出現・継続に与える影響
  - ・ 学校評価の IRT スケールに基づく CS 分析法の開発
- 2021年度修了
  - ・ 公立高校再編が教育活動に及ぼす効果—2000 年代以降の「学科統合型」高校と総合学科高校に着目して—
  - ・ 情報リテラシー尺度の作成と信頼性および妥当性の検討
- 2022年度修了
  - ・ 高等学校における「生徒の探究活動への取組」と「育成を目指す資質・能力」の関係
  - ・ 教科指導における 中学校教員のICT活用指導力向上のための尺度開発と特徴分析



## 修了生の声

### [2019 年度修了生]

- (指導主事)2年間という時間、自分の研究課題に向かうことができ、これまで知らなかった教育行政学や分析について学ぶことができた。指導主事学校訪問の際の校内研究指導助言で、実態の分析について大学で学んだ知識が役立った。生徒指導業務に関して、管内の問題行動のデータの分析に役立てることができた。
- (教諭)大学院では自然言語処理の手法を活用し、学習者が記述した文章を分析する方法について研究しました。現在も、生徒が日々蓄積している振り返りの記述を分析し、授業改善に活用しています。また、アセスメントやテスト理論について学んだことにより、「何のための評価か」「何のためのテストか」さらには「これからの学校の在り方とは」を日々考えるようになりました。

### [2020 年度修了生]

- (指導主事)2年間じっくりと学術研究に取り組むことができ、大学の先生方や院生とのつながりができた。教員研修や行政に関わる仕事を進める上で、教育行政の知識や考え方、質的・量的データの見方や分析方法、アカデミックライティングなどが役立っていると感じている。指導主事という立場から、教育研究に対して指導助言する上で、派遣研修で取り組んだ学術研究の進め方が参考になっている。
- (教諭)派遣研修を通して、現場では知る機会のなかったテスト理論や IRT に触れ、現場で実施するテスト等のデータ分析の視野が広がりました。また、最新の知見を学べたこと、情報収集力が向上したことで、エビデンスに基づいて ICT 活用や授業改善を図ることができるようになりました。

### [2021 年度修了生]

- 研修に来る前は、教員としての経験則から日々の課題解決を図っていたが、2年間の大学での学びから、エビデンスを重視した考察の重要性を認識することができた。またそのスキルのいくつかを学べたことも収穫である。
- 現場で日々の教育実践に追われていた私にとって、この派遣事業は「教育に関する学び直しの機会」として大変有意義なものでした。特に、アセスメント、情報リテラシー、統計科学などに関して知見を深めることができました。この経験を、宮城の児童・生徒に還元していきます。

### [2022 年度修了生]

- 2年間の研究活動は、総合的な探究の時間の重要性・SSH の効果の可能性を定量的・定性的に示すことに向けて取り組みました。学びの面では、教育評価のみならず、これまでの現場経験において肌感覚で得た教育観を、心理学・統計学をはじめとした観点から再考し深めることができました。また校種・職種を超えた様々な方々との日々の学びを通して広く深く教育を捉える経験ができました。
- 2年間の派遣事業を通して、エビデンスにもとづく教育や教育アセスメントに関する専門的な知識・スキルを学ぶことができました。他にも、統計学や自然言語処理、計量

心理学等、幅広い分野の学びを通して、教員としての視野を広げることができました。今後は、ICT やデータサイエンスを活用した新たな教育の創出や授業改善に取り組んでいきたいと思いをします。

これらの事業の成果・進捗報告会(東北大学大学院指定派遣教員研修成果報告会(2月13日(月)16:00~17:30 オンライン)を教育委員会の幹部層(宮城県教育庁教職員課長 鏡味佳奈氏他3名)に対して行い、成果について「国で進めている教員の学び直しのモデルケースとなり、その研修内容も宮城県のみならず全国展開できる質の高さである」などの非常に高い評価を得た。

#### 【さまざまな社会貢献】

仙台市

依頼元	職名	従事内容
仙台市教育委員会	仙台市社会教育委員	社会教育法第 17 条に規定される職務
仙台市	非常勤嘱託職員(医師)	仙台市児童相談所親子こころの相談室における医学的診断及び評価業務
仙台市子供未来局	保育所・幼稚園・認定こども園スーパーバイザー	1園あたり年3回(1回につき4時間程度)の市内保育現場における助言指導業務及びこれに付随する連絡会議等への出席。
仙台市子供未来局	児童福祉専門分科会委員	児童福祉に関する事項の調査審議を行う。
仙台市教育局生涯学習支援センター	研修会講師	講和ならびに指導助言
仙台市教育委員会	教育に関する事務の管理及び執行の状況の点検及び評価における学識経験者	仙台市教育委員会が作成する「教育に関する事務の管理及び執行の状況の点検及び評価の結果報告書」に対し、学識経験者としての意見を記述するもの。
仙台市子供未来局	仙台市子ども・子育て会議委員	子ども・子育て会議に参加し、子ども・子育て支援事業計画等に関連する施策の実施状況の調査審議等を行う。

社会福祉法人 仙台市社会福祉協議会	研修会講師	公立保育所特別(保育)支援コーディネーター(初級)に対する講義
仙台市子供未来局	講師	発達相談、養育相談等に従事する心理判定員及び保健師等を対象とした研修会の講師。
仙台市子供未来局子供育成部子供相談支援センター	市民セミナー講師	子育てや家族のコミュニケーションの在り方について考えを深める一助とするための講演(不登校・ひきこもり分野) テーマ「不登校・ひきこもりの子どもたちへのより良い関わり方」 ～家族心理学を生かして～
仙台市教育委員会	仙台市学校生活支援巡回相談員	学校からの要請に基づき、発達障害に関連する行動やいじめ、不登校などの問題行動等があるなど、特別な配慮を必要とする児童・生徒の対応について、指導・助言を行う。

## 宮城県

依頼元	職名	従事内容
宮城県	宮城県 NPO 等の絆力を活かした震災復興支援事業審査委員会委員	学識経験者の立場により、宮城県 NPO 等の絆力を活かした震災復興支援事業のうち、NPO 等の絆力を活かした震災復興支援事業(助成事業)に係る、申請内容等の審査、進捗状況の把握及び評価等を行うもの。
宮城県子ども総合センター	応援医師	外来患者にかかる診療(児童精神科)を行う。 第4火曜 9:00～9:50 は所内症例検討会があります。所内の心理士に対し、助言・指導を行っていただきます。
宮城県教育委員会	宮城県立高等学校スーパーサイエンスハイスクール運営指導委員	宮城県立の高等学校で、スーパーサイエンスハイスクールにおける運営指導委員として、当該高等学校のスーパーサイエンスハイスクール事業の運営に関する指導、助言、評価を行う。
宮城県仙台第三高等学校	講演会講師	「文部科学省」と題した講演

宮城県教育委員会	高等学校入学者選抜審議会委員	教育委員会の諮問に応じ、高等学校の通学区域の検討、入学者の選抜の方法及びその実施並びに学力検査問題の作成について調査審議する。
宮城県	宮城県私立学校審議会委員	知事からの諮問に応じ、私立学校に係る認可等の審議を行う。
宮城県教育委員会	宮城県立学校の令和5年度使用教科用図書の採択に係る審査委員	宮城県立学校の令和5年度使用教科用図書の採択に係る教科書調査研究報告書等の審査
宮城県仙台東高等学校	宮城県仙台東高等学校学校評議員	学校経営に関するアドバイザーとして、校長の求めに応じて一人一人がそれぞれの責任において、意見や助言を述べる
宮城県教育委員会	高等学校入学者選抜審議会 専門委員	令和2年度入試から実施している現行入試制度の検証について、調査・研究する。
宮城県社会教育委員連絡協議会	研修会講師	講話「(仮)今社会教育に求められているもの」 ※講話の題は変更する場合があります。
宮城県教育委員会	県立高等学校及び県立特別支援学校高等部における令和5年度使用教科書採択に係る審査委員	県立高等学校及び県立特別支援学校高等部における令和5年度使用教科書採択に係る教科書調査研究報告書等の審査
宮城県教育委員会	みやぎの協働教育連絡会議構成員	みやぎの協働教育連絡会議構成員として、本県が推進する「協働教育推進総合事業」に係る各方策等について、学識経験者の立場により指導助言を行う。
宮城県仙台第二高等学校	講師	高校1年生の希望者に講義を行う。
宮城県石巻高等学校	大学模擬講義 講師	高校1・2年生を対象とし、各専門分野に関する研究内容等を踏まえた講義の受講を通して、大学に対する理解を深めるとともに、進路実現に向けた意識の高揚を図
宮城県宮城第一高等学校	探究アドバイザー	教育分野における生徒への指導・助言



宮城県岩ヶ崎高等学校	講演会講師	思考力, 判断力, 表現力を養う探究型学習について
宮城県岩ヶ崎高等学校	「総合的な探究の時間」の講師	2学年「総合的な探究の時間」における課題解決の指導・助言
宮城県仙台第三高等学校	SSH 運営指導委員	運営指導委員会委員として学識経験者の立場により, 本事業への指導・助言評価等を行う。

 EBPM.png,  指導者講座ポンチ絵.JPG,  EBPM 添付資料.jpg

#### 4. 研究および教育のグローバル化の促進に向けた取り組み

「研究」

No.02 (1)-2 卓越した研究を基盤とした国際共同教育の深化, No.16 (4)-1 世界から学生を惹きつける最先端の国際プログラムの開発・提供等, No.17 (4)-2 オープンでボーダレスなキャンパスにおける国際共修の展開, No.28 (2)-1 国際共同利用・共同研究拠点及び共同利用・共同研究拠点の機能強化

実績報告

##### (1) 研究のグローバル化の促進に向けた取り組み

##### 【研究成果の国際的発信力の強化】

英文ジャーナル "Annual Bulletin, Graduate School of Education, Tohoku University" へのオンライン・アクセス数の推移を見ると、2017年度以降、閲覧数は徐々に増えている。2021年度（令和3年度）にアクセス数が倍増した。2022年度は、前年度からは低下したがそれ以前と比べると上昇傾向は続いている。ダウンロード数については、2018年度に著しく高い数値を示しているものの、概ね500～600の範囲で安定している。引き続き、さらなるアピールの方法を探っていく必要がある。なお、英文電子ジャーナル第9巻を2022年度（令和4年度）に発行した。

	2017年度	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度
閲覧回数	108	142	238	228	475	328
ダウンロード数	504	1,297	549	637	547	729

Annual Bulletin の閲覧回数およびダウンロード数

### 【国際共同研究推進事業の実施】

教育学研究科における研究のグローバル化を推進するとともに、国際的に評価される研究の生産力を向上させることを目的とする2種類の事業、すなわち、①国際共同研究(1件 150万円未満、1件程度)、②国際共同研究の準備のための事業(1件 50万円未満、数件程度)について周知を図ったところ、①について2件、②について1件の申し出があった。2022年度(令和4年度)は、①について2件を採択し、計300万円の補助を行った。なお、採用された2件の研究課題は「アジア太平洋地域における『教育の新たな社会契約』の再構想」「道徳的誇り(Moral pride)の文化差:親の躾場面における日加比較研究」である。12月には国際シンポジウムが開催されるなど、研究は着実に進行している。

東北大学大学院教育学研究科 国際シンポジウム 2022

# アジアから 発信する心理学

## 社会的文脈とコミュニケーション

2022年12月17日(土)  
13時-15時  
完全オンライン開催

第1部  
「道徳的誇り」の文化差について  
東北大学大学院教育学研究科 教授 長谷川 真里  
宮城教育大学 准教授 越中 康治

第2部  
言語習得における社会的文脈・環境・相互作用の重要性  
-脳科学的観点から-  
東北大学大学院国際文化研究科 准教授 鄭 娉婷 (ジョンヒョンジョン)

第一言語(L1)と第二言語(L2)習得において、子どもと大人の間には違いがあることを、これまで多くの研究が示してきました。その理由について、近年では、脳内の習得メカニズムが根本的に異なるというより、L1とL2の習得・学習方法の違い、子どもと大人を取り巻く社会的文脈・条件・環境の違いが重要な要因であることが示唆されています。本発表では、脳科学的手法を用いて、言語習得に社会的文脈、社会的相互作用、実生活の経験が重要であることを検証した一連の研究を概観します。

司会・進行 東北大学災害科学国際研究所 夏藤 希

企画運営: 日本発達心理学会「道徳性・向社会性分科会」  
長谷川 真里・越中 康治・夏藤 希  
お問い合わせ: ryo@tohoku.ac.jp (総編集: 東北大学災害科学国際研究所)

お申し込み  
https://forms.gle/42n9JRMq83Cz9FKL5

### 【国際学術ウェビナー・国際フォーラムの開催】

昨年度に引き続き、国際学術ウェビナー・国際フォーラムの開催に積極的に取り組んだ。今年度の国際学術ウェビナーシリーズの主たる目的は、日本を含むアジア太平洋地域における「教育の新たな社会契約」を作り出すために、社会対話による「誰一人取り残さない教育」の在り方を探求することである。オンライン形式とハイブリッド形式を使い分けながら、中国、香港、韓国、タイ、オーストラリアからの参加者と議論した。さらに、AEL参加学生の研究発表会や国際シンポジウム、公開講座なども開催し、し、本部局の研究教育活動の国際的な展開及び教育分野における本学の国際的なプレゼンスの発信を強力に推進している。なお、国際ウェビナーの一部(ハイブリッド開催部分)は「社会にインパクトのある研究」の活動として補助を受けている。

[国際ウェビナーシリーズ]

- 2022年11月26日 国際学術ウェビナーシリーズ1: "Higher Education for A Just and Sustainable World 1 Transforming teaching and learning"。オンライン開催、参加者52名。
- 2022年12月17日 国際学術ウェビナーシリーズ2: "Higher Education for A Just and Sustainable World 2 Transforming teaching and learning in the Asia-Pacific Region"。ハイブリッド開催、参加者106名。
- 2023年2月18日 国際学術ウェビナーシリーズ3: "Education and Caring for the Well-being of Youth in East Asia: Current issues, concerns and prospect"。オンライン開催、参加者43名。
- 2023年3月4日 国際学術ウェビナーシリーズ4: "The Future Strength of Young Researchers in Education: What are we doing? What will we do?"。オンライン開催、参加者43名。

[AEL 発表会]

- 2022年9月7日 AEL Forum 2022 Summer: Exploring Breakthroughs for Future Education. (AELC 参加学生の研究発表会): オンライン開催、参加者52名。
- 2023年3月11日 AEL Forum 2023 Winter: Graduate Programs in Education: A Comparison in East Asia (AELC 参加学生の発表会): オンライン開催、参加者15名。

[その他]

- 2022年12月17日 国際シンポジウム2022: 「アジアから発信する心理学: 社会的文脈とコミュニケーション」オンライン開催、参加者約30名。
- 2022年12月18日 公開講座「比較教育学に関する論文の国際ジャーナルへの投稿」ハイブリッド開催、参加者22名(日本比較教育学会国際交流委員会と本部局が共同開催)。

**【UNESCO バンコク事務所との包括的学術交流協定に基づく研究のグローバル化への取り組み】**

UNESCO バンコク事務所との包括的学術交流協定に基づき、上述したウェビナーのうち、Dr. Libing Wang(バンコク事務所教育革新・能力開発課長)を招聘し、12月17日開催の国際シンポジウム "Higher Education for A Just and Sustainable World 2" において基調講演を、18日には「未来の教育とUNESCO」というテーマで Dr.Wangと本部局学生10名、宮城第一高校生徒10名の交流会を開催し、「未来の教育とユネスコの役割」「国際機関でのキャリア形成」というテーマで英語討論を行った。2023年3月17日には野口研究科長、小嶋副研究科長、劉准教授がUNESCO バンコク事務所を訪問し、協定更新の調停式に出席した。また、同日、部局間交流協定の準備のためにチュラロンコン大学教育学部を訪問し、学生交流の拡大を目途に、協定調停に向けて協議した。



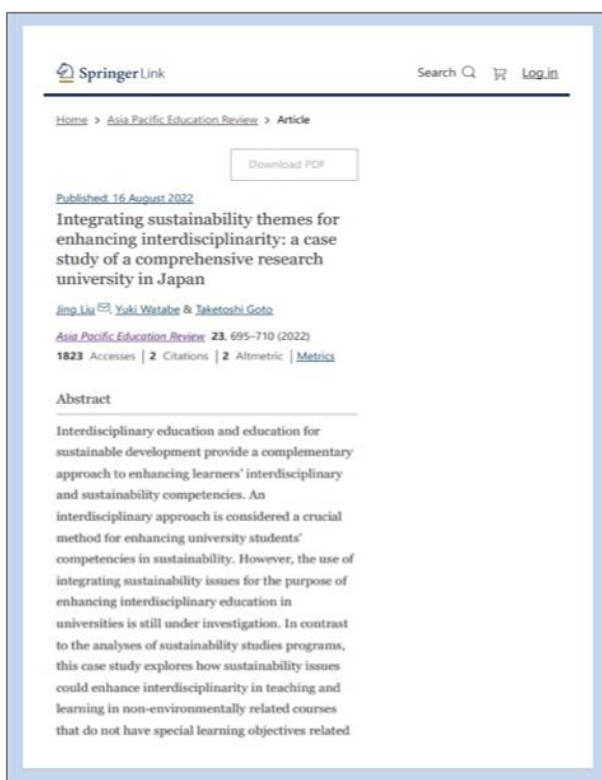
「未来の教育と UNESCO」交流会(2022 年 12 月 18 日)

#### 【教育と研究の融合ならびにグローバル化の進展】

本部局は 2018 年度(平成 30 年度)に改組し、大学院授業科目として「エデュフェア・マインド」を新設した。この授業をベースにした学術論文 "Integrating sustainability themes for enhancing interdisciplinarity: a case study of a comprehensive research university in Japan." が国際誌に特集論文として掲載されており、8 月の掲載以降ダウンロード数は 1823 にのぼる(3 月 13 日現在)。学際的学習環境(担当教員・受講学生)と公正・平等に関するディスカッションの場を提供する教育カリキュラムデザインが、アジア太平洋地域において多くの注目を集めている。この授業についてはその他の英語論文も掲載されており、関心の高さを示している。本欄末尾に論文情報を記載する。なお、この授業は令和 5 年度した国際学位コースにおいては英語クラスとして出講される。協力教員を含めた本学専任教員 6 名のほか、ユニバーシティ・カレッジ・ロンドン(UCL)と国際協力機構 JICA から外部講師を招聘する予定である。

- Liu, J., Kitamura, Y. & Savelyeva, T. Building an 'Ecosystem' for transforming higher education teaching and learning for sustainability. *Asia Pacific Educ. Rev.* 23, 539-542(2022). <https://doi.org/10.1007/s12564-022-09794-1>
- Liu, J., Watabe, Y. & Goto, T. Integrating sustainability themes for enhancing interdisciplinarity: a case study of a comprehensive research university in Japan. *Asia Pacific Educ. Rev.* 23, 695-710 (2022). <https://doi.org/10.1007/s12564-022-09788-z>
- Dr. Tamara Savelyeva, Dr. Jing Liu Problematising development and education for sustainability Emerald Publishing (emeraldgroupublishing.com) *International Journal of Comparative Education and Development*
- Dr. Zhou Zhong, Dr. Jing Liu, Dr. Keyang Tang Higher Education Quarterly Higher Education for Sustainable Development: Cross-disciplinary Perspectives of Space (Call for Abstracts) ([wiley.com](http://wiley.com)) *Higher Education Quarterly*





Asia Pacific Education Review 掲載論文

## (2) 教育のグローバル化の促進に向けた取り組み

### 【国際学位コースの設置】

本年度、国際学位コースを開設し、2023年(令和5年)10月に第一期生が入学する予定である。本実績報告書「1」にて詳述しているので参照されたい。

### 【UNESCO バンコク事務所・アジア太平洋地域教育局へのインターンシップ派遣】

今年度、1名の大学院生の UNESCO バンコク事務所・アジア太平洋地域教育局へのインターンシップ派遣を行った。これは教育学研究科としては初めての、国際機関におけるインターンシップの実施となる。新型コロナウイルス感染症の影響で期間中5月から9月まではオンラインでの研修となり、10月から約1か月間現地でインターンシップを行った。期間中は国際会議の準備や運営、年度報告書の作成、アジア太平洋地域の教育関連データの取集等を行った。帰国後、学部1年生が受講する新設科目「教育学への招待」においてインターンシップの内容と感想を披露し、学部生が早期に海外に目を向ける機会を提供した。その結果、劉准教授に学部1,2年生3名からインターンシップに関する問い合わせがあるなど、当初のもくろみを越えた成果も現れ始めている。なお、インターンシップ参加者は現在修士課程の2年生であり、4月からは中国で公務員として国際関係の業務に携わる予定である。



UNESCO バンコク事務所インターン中の大学院生との  
オンラインによる対話(2022年11月24日)

### 【AELC(Asia Education Leader Course)事業の実施】

2022年度(令和4年度)は、新型コロナウイルス感染症の国際的感染の状況に合わせて、対面での参加者13名も含めたハイブリッド形式(夏季)と、オンライン形式(冬季)で開催した。夏季コースは2022年8月16~27日に東北大学主催でハイブリッド形式によって行われ32名が参加した。十分な感染対策の下に学外でのフィールドワークを含む45コマの授業を実施した。JICA東北センターを訪問し、日本における国際開発援助に関する講義を受講し、持続可能なグローバル社会にあり方について意見交換を行った。東松島市におけるフィールドワークでは、海苔づくり工場の見学と震災復興のための若者の起業に関する話を聞き、意見交換を行った。海外参加者はハイブリッド形式で参加し意見交換を行い、特に、台湾地震もあった台湾政治大学からの参加者(学生5名教員1名)からの反響は大きかった。このコースでは、一部の授業に宮城第一高校在学者13名が参加している。高校生からは、他国の教育事情を理解し意見交換できたことや、国籍や年齢を越えた学びの機会を得たことに対する高い評価が得られた。なお、フィールドワークには常盤木学園高校からもオンラインによる参加があった。冬季コースは2023年(令和5年)1月16~19日、2月1~9日に南京師範大学主催でオンライン形式によって実施され34名が参加した。本部局に限らず多くの参加大学でAELCの単位化が進むなど、各国大学の協力の下、本プログラムの展開は当初の想定以上に順調に進められている。



AEL 夏季コースのハイブリッド開催式(2022 年 8 月 16 日)

#### 【大学院生による研究の国際的発信に対する支援事業】

「海外学会発表渡航費援助事業」(上限 7 万円、年間 3 名程度)および「国際発表論文掲載料等補助(上限 10 万円、年間 5 名まで)を今年も継続した。後者に 1 件の申請があり採用された。

#### 【日本学生支援機構(JASSO)奨学金による海外留学支援】








本部局学生の海外留学を促進するために、日本学生支援機構(JASSO)による海外留学支援制度(協定派遣)に「エンゲージド・ラーニングによる持続可能なアジアのための教育リーダー育成プログラムを」提案し、令和 5 年度分の学生旅費 312 万円について内定を受けている。その内訳は学部授業「海外教育演習」12 名(中国:北京)、大学院授業「国際共同演習」(タイ:バンコク)12 名、AELC 夏季(韓国)12 名、AELC 冬季(台湾)12 名である。

#### 【外国人教員の採用・任期延長】

本年度は部局として新たに 2 名の外国人教員を助教として採用した。また、助教の任期を 3 年から 5 年に延長(1 年の再任可)し、すでに勤務していた 3 名の外国人教員の任期が延長された。本部局に所属する外国人教員は合計 7 名となっており、専門分野の教育活動はもちろん、国際交流支援室で実施している新入生オリエンテーション、日本語学習支援事業、進路懇談会などの各種事業を通して幅広く留学生を支援することによって、部局の国際化に貢献している。

### 【宮城県内高等学校と協力した国際交流活動の促進(予定)】

本年度本部局が主催した AEL コースに参加した高等学校の一つである常盤木学園高校で令和 5 年度から実施される国際交流事業に本研究科の留学生を中心に、複数の留学生が講師として参加する予定である。同校には本部局のグローバル共生教育論コース修士 2 年の課程令和 5 年 3 月修了予定者が勤務しており、このような活動を開始するきっかけとなった。改組に伴う大学院の充実と AELC の充実が結びつき、地域の高校を巻き込んだ新しい教育環境が生まれつつある。

 bulletinAccess.png,  UNESCO 交流会2.png,  springer.png,  UNESCO インターシップ交流会.png,  AELC-SC2022-o.png,  アジアから発信する心理学.png,  bulletinAccessNew.png

## 5. 全学 ISTU および東北大学 MOOC の運営支援

「教育」

No.08 (1)-1 ラーニング・アナリティクスによる学びの高度化の推進, No.10 (1)-3 先進的 ICT を活用した教育基盤の構築, No.46 (1)-2 全学 DX によるデジタル・キャンパスの推進, No.06 (2)-4 「社会とともにある大学」としての社会連携の強化

### 実績報告

#### (1) 全学 ISTU への運営支援

##### ISTU 支援室による全学的な支援

教育学研究科では、データ駆動科学・AI 教育研究センターと協働し、ISTU/DC(以下 ISTU)をはじめとするオンライン教育システムの運営支援を行ってきた。そのために教育学研究科内に ISTU 支援室を設置し、医学系研究科・工学研究科をはじめとする各研究科における ISTU 運用、および教職員向けの e-ラーニング教材の撮影・制作支援および実施支援を行っている。具体的な支援部局は下記のとおりである。なお ISTU 支援室による 2022 年度の撮影講義数は約 260、編集講義数は約 330(再編集含む)に上る。

**2022 年度 ISTU 支援室の支援対象部局等:** 医学系研究科, 工学研究科, 歯学研究科, 情報科学研究科, 農学研究科, 文学研究科, 教育学研究科, 理学研究科, 生命科学研究科, 東北大学病院, 全学教育, 災害科学国際研究所, 動物実験センター, 附属図書館, 利益相反マネジメント事務局, 研究推進課, 総務企画部, 人事企画課, 教育情報基盤センター, 高度教養教育・学生支援機構, 国際共同大学院プログラム事務局, 教育・学生支援部, 研究倫理推進支援室, 学生相談・特別支援センター, 総合地域医療教育支援部, メガバンク用度係, 未来型医療創造卓越大学院プログラム推進室, 東北メディカル・メガバンク機構, 工学教育院。

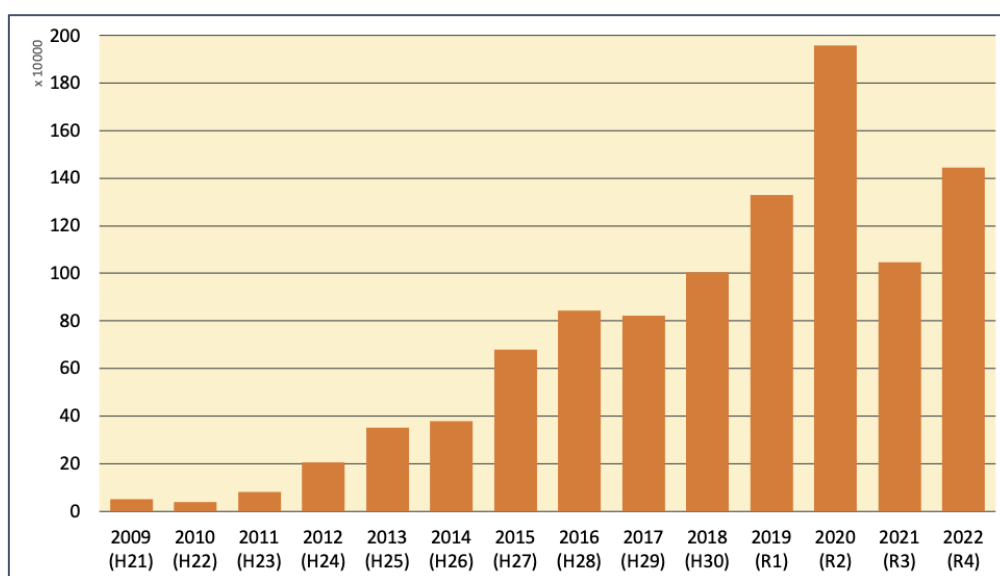
### ISTU 利用状況

ISTU の利用は、2018 年度まで年々着実な伸びを見せてきたが、2020 年度にはコロナ禍の影響により、教材参照が 200 万回に迫るほどの伸びを記録し、コロナ禍の影響が収まりつつある現在に至っても、多くの講義でオンライン授業が活用されるようになっている。2021 年度からは、ISTU だけでなく、Google Classroom や Microsoft Teams 等の LMS(学習管理システム)の利



用も浸透し、教材参照回数はコロナ禍以前のレベルに収束しつつあるが、教育に利用する LMS が多角化したことを考えると、全体として教育のデジタル化はより推進されてきたことが推察される。

本学の ISTU は、2021 年秋から新システム (ISTU/DC) として稼働し、本年度は年度初頭より全面的に新システムの利用が可能になった。旧システムと比べて、クラウド活用によりアクセス輻輳への頑健性が増したこと、そして近年の LMS 研究の成果を取り込みシステムの利便性が向上したことから、ISTU の利用度が前年度から 40% ほど増加している。なお、グラフの「教材等参照回数」は、ISTU 内部での講義動画等の参照回数のみをカウントしたもので、並行して利用された Google Classroom 等へのアクセス数は含んでいない。このため、東北大学における e-ラーニング全体としては、グラフに示した数値以上の利用度向上があったと考えられ、ISTU 支援室の活動はオンライン講義発展のためにますます重要になるとと思われる。



ISTU 教材等参照回数の年度別推移 (単位は万回)

## (2) 東北大学 MOOC への運営支援 MOOC の企画・運営支援

東北大学 MOOC は、本学が対外発信する教育コンテンツとして着実に定着し、さらに学内での教育活用も始まってきている。本年度は新たに 2 講座「痛みと麻酔科学」と「自己理解の心理学」の開発を行い、これらを新規開講した。また新規開講講座のほかに、従来からの 8 講座を加えた合計 10 講座を開講した。これまでの開講実績は 2016 年度から 7 年間で 12 講座 46 回となり、累計受講登録者数は 102,947 名 (本年度末の確定値) となっている。また、制作実績としては 16 講座 669 コンテンツであり、その中に英語化した 4 講座 161 コンテンツが含まれる。

本年度の東北大学 MOOC の全受講者は 20,306 名 (本年度末の確定値) であった。新規開講した「痛みと麻酔科学」は、医学系研究科の山内正憲教授、東北大学病院麻酔科の杉野繁一講師と大西詠子助教を講師とした。受講者は 1995 名、満足度は 98.3% (「大変満足」58.5% + 「まあ満足」39.8%) であり、受講者数だけでなく質の点でも高い評価を得ている。



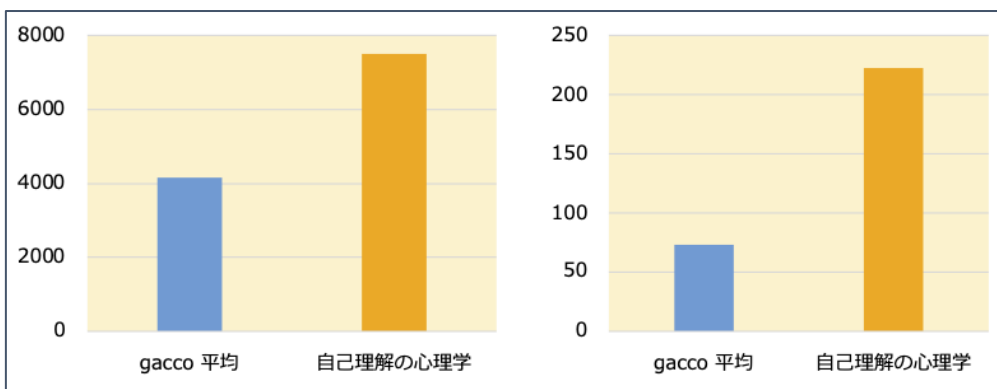
新規開講した「痛みと麻酔科学」

### 教育学研究科教員による MOOC 新規開講

もうひとつの新規開講講座である「自己理解の心理学」は、副センター長を務める本部局の教員（中島准教授）がコンテンツ開発と講座運営を担った。本講座は 2023 年 1 月 25 日から 2023 年 3 月 28 日まで新規開講し、7,510 名が受講登録、223 のディスカッションスレッドが立ち上がっている。これは gacco プラットフォームにおける講座平均（受講登録 4,145 名・スレッド数 73、『研究データ管理オンライン講座の開発と受講者特性の分析』、古川雅子 著、2018）を大きく上回り、講座終了時点で 591 名が最終成績を得るに至っている。また、東北大学 MOOC での過去最多の受講登録者数（第 2 位は「男と女の文化史」の 5,246 名）となっている。



新規開講した「自己理解の心理学」



新規開講した「自己理解の心理学」の受講者数とディスカッションスレッド数

## MOOC 支援体制について

これら活動の運営主体となるのはオープンオンライン教育開発推進センターであり、教育学研究科からは、副センター長および関連する各種委員に、のべ9名の専任教員が参画し、MOOCのコンテンツ開発・運営・評価等を支援している。また本年度は、再開講の講座「社会の中のAI～人工知能の技術と人間社会の未来展望～」に本部局の教員2名が出講しており、受講者とのディスカッションに従事している。加えて、これらMOOCコンテンツを本学学内の教育に活用する取り組みも、さらに進められた。とくに全学教育におけるカレントトピックス科目として、クォーター制で「放射性安全社会入門」「化粧品で学ぶ心理学I」など7科目を開講し、学内における累計履修者数は2408名に達した。

教育コンテンツとして見た時のMOOCは、現状は自動採点という評価の都合上、主に単純記憶のレベルで新たな知識を加えるものに留まる。また自由に受講でき、強制力もないために最終課題まで到達する受講者はgacco全体で平均5.5%となっている。そのような悪条件の中でも、東北大学MOOCでは、教員やTAが積極的に関与することで活発なディスカッションスレッドなどを実現している。現在、このような東北大学MOOCの優れた点をより増進させることや、修了者や成績優秀者へのマイクロ・クレデンシャル(バッジ等)の発行などの検討を進めている。

 自己理解の心理学.png,  痛みと麻酔科学.png,  ISTU教材参照回数3月末.png,  自己理解の心理学3月末.png

## 6. 教員の研究時間確保に係る取組実績

「教員の研究時間確保」

### 実績報告

#### ①国家資格である公認心理師対応カリキュラムの実施に伴う助教の配置

教育学部・教育学研究科においては、国家資格として新しく設置された「公認心理師」の受験資格取得カリキュラムにいち早く、平成30年度より対応した。このことに伴い、心理学関連科目数の大幅な増と、とりわけ実習に関わる事前指導ならびに実習先への訪問指導に関わる教員の時間が著しく増大することとなった。

以上のような、教員の教育負担の大幅な増に対応するため、平成30年4月1日付けで、新しく助教2名(任期3年)を教育心理学講座に配置し、他大学への転出などにより助教の欠員が生じた場合には、すぐに後任の採用を行ってきた。令和3年度に2名の助教の他大学等への転出が決まったことにより、すぐに後任の採用に向けて選考委員会を設置し(それぞれ、令和4年1月19日付け、令和4年3月19日付けで設置)、令和4年度になってすぐに1名を採用(令和4年4月1日付け:任期3年)し、もう1名についても令和4年7月1日付け(任期3年)で採用した。

#### ②国際交流支援室の設置に伴う助教の配置

平成30年度の教育学研究科組織再編に伴い、教育学研究科内に従来設置されていた教育ネットワークセンターを先端教育研究実践センターに改組するとともに、国際的な学術交流の一層の推進を図るため、同センター内に国際交流支援室を設置した。

国際交流支援室では、教育学研究科教員が開催する国際シンポジウムや国際ウェビナーの運営支援、国際共同教育プログラムであるアジア・エデュケーション・リーダー・コース(AELC)の開催・運営支援、海外の大学等との学術交流協定の締結・更新、留学生支援などの業務を担っている。

る。

国際学術交流推進の重要性と教員の負担軽減の観点から、国際交流支援室には2名の助教(任期3年)を配置している。なお、当初配置した助教のうちの1名は、本学の戦略的人事の促進に係る支援制度を利用して、学術研究員であった女性研究者を助教として採用しての配置であり、当初は支援期間終了後は学術研究員のポストに戻す予定であった。しかしながら、国際学術交流推進および教員の負担軽減の重要性に鑑み、当該助教が令和3年4月末日付で他大学に転出した後も、引き続き助教を採用することとした。後任の助教については、令和3年6月16日教授会において採用を決定し、令和3年9月1日付けで採用している。

### ③国際学位コース設置に伴う助教の配置

教育学研究科においては令和4年度に博士課程後期3年の課程に国際学位コースを設置した(令和5年1月に第1回の入試を実施、令和5年10月より学生の受け入れをスタート)。国際学位コースの設置に伴い、コースの運営や入試等に係る業務が増加することが想定されたため、このコースを担当する助教を新たに配置することとした。この助教については、令和3年11月17日付けで選考委員会を設置し、令和4年4月1日付け(任期3年)で採用した。

### ④助教の任期規定の改正

これまで、教育学研究科における助教の任期については3年、再任不可としてきたが、助教が担う研究・教育上の業務の継続性を担保し、そのことにより特に関係機関・関係者との連携にかかる業務遂行の効率性を高めることを意図して、助教の任期を5年、再任可(ただし1回に限り、再任の場合の任期は1年)とする任期規定の改正を令和5年1月18日教育学研究科教授会において決定した。なお、この改正については、既に助教として任期付きで採用されている者にも適用することとした。

### ⑤留学生対応の事務職員の配置

上記の国際学位コースをはじめ、増加しつつある留学生に対応する事務側の体制を整え、留学生に係る諸々の事務に関する教員の負担を軽減するため、令和3年12月9日付けで事務職員1名(派遣職員)を新たに配置した。同職員が令和3年度末をもって契約期間満了となった後も、新たな事務職員(派遣職員)を配置できるように準備を進め、令和4年4月1日で事務職員(派遣職員)1名を採用した。さらに、この職員の派遣期間終了後も、引き続きこの体制を維持している(新たな派遣職員を5月9日付けで採用)。